

なぜ生きる

高森 顕徹 監修 明橋 大二・伊藤 健太郎共著

人生最大の目標を成し遂げた人で、その目標達成とほぼ同時に、寂しく・虚しく・放心に近い感情を抱き始める事のない人は滅多にいない、他人の人生を見るまでもなく、それが本当だと云うことは私「ドナルド・トランプ」には分かる、他の誰にも劣らずその落とし穴に陥りやすいのだ。

人間を根本的に動かしているのは「優越を求める心」だと、個人心理学の祖であるアドラーはいう、人は生まれつき優れた人間になりたいと思っていて、周囲も然り、生存競争の激しい現代は学歴・出世競争はエスカレートするばかり。

{ 人生究極の目標 }

苦しみの元を断ち切って「人間に生まれてきてよかった」という生命の歓喜を得る事死をありのまま見つめることは、いたずらに沈むことではなく、生の瞬間を日輪よりも明るくすることこそ第一歩、人生の目的は「苦しみの波の絶えない人生の荒海を明るく渡す大船に乗り未来永遠に生きる事」

{ 人生を暗くする元凶・苦悩の根元は＝無明の闇 }

無明の闇とは「死後どうなるのか分からない心」無明の闇が晴れると、二つの事がハッキリする。

① 自己の真実つまり本当の私「世界で最大の事は自己を知る事である」

とモンテニューは(16世紀に仏を代表する哲学者)云っている。

「後生の暗い心とは自己の現在を隠すもの、それが無明の闇」無明が破れて自己の素顔が明らかになると過去も未来も鮮明になる。

② 弥陀の誓願まことである

「死後のはっきりした無明の闇を破り極楽浄土へ必ず往ける大安心・大満足の身にして見せる」これを往生極楽の道、難渡海を渡る大船と云った。必ず浄土へ往けると大満足の身になった時「弥陀の誓願誠だった」とはっきりする、これを「法の深信」

{ 弥陀の救いは二度 }

この世では弥勒菩薩と同格、死ぬと同時に弥陀の浄土で無上の悟り(滅度)が得られると、親鸞聖人も答えている。

{ 未来明るい智者になるには }

いつ死んでも浄土往生間違いなし、と行く先の明るい人が本来の智者であり、 P 1

智者と愚者は「後世を知るか否か」で分けられると。

阿弥陀仏を一切の諸仏や菩薩達が「智慧光仏」と絶賛するのは、後生暗い無明の闇(=菩薩の根元)を破るから「智慧の太陽」という。

アインシュタイン～科学を何に使うのか～その目的を教えるのが学校の役目「私の世界観」という本の中で「人生の意義に答えるのが宗教だ」とも書いている、21世紀は「宗教の時代」と云われるのは、最も大事な人生の目的をはっきり指し示す「真の宗教」が危惧されているから。

{ 弥陀の浄土へ行き易いとは }

大悲の願船に乗った人の事、但し大悲の願船に乗る人は稀なるも乗った人の人生は浄土への楽しい航海となる「尊いとか卑しいとか・僧侶とか俗人とか・男女・老少・罪の軽重・善根の多少等拒むものは何もない、完全自由な世界」金輪際、幸せと無縁の者を無上の幸せにする。

{ 人生の目的が完成すればどう変わる }

無明の闇が破られ、未来永遠の幸せを獲得する。

「人間という者は欲や怒り・腹立ちの心・妬みや嫉み等の塊である、それらは死ぬまで静まりもしなければ減りもしない、もちろん断ち切れるものでは絶対はない」しかし雲や霧で天が覆われていても雲霧の下は明るくて闇がないようにどんなに煩惱に覆われていても日光で智慧の太陽で心は明るく浄土に遊んでいるように楽しい。

渋柿の渋がそのまま甘みになるように煩惱(苦しみ)一杯が功德一杯(幸せ)となる。

{ 念仏もうさんと思いつ心＝他力の信心 }

他力とは「仏陀より賜ること」信心とは「念仏もうさんと思いついた心のおきた瞬間に「摂取不捨」の幸せを得て人生の目的が完成する。念仏とは「南無阿弥陀仏」と申す。

{ 念仏者は無碍の一道なり }

摂取不捨「他力の信心を獲得した人」の利益を得た念仏者は一切の障りが障りにならない素晴らしい世界に生かされる(無碍の道)不自由の中に自在の自由を満喫する。

{ 自力の信心と他力の信心 }

自分の信心は人それぞれが常識であり浄土に行けない「他力の信心」とは知恵や才能・専門や経験の有無、健常者・障害者、人種や職業、貧富の差、善人と悪人など関係なく、全ての人たちが同じ喜びの世界に共生できる人生の目的は番人共通、阿弥陀仏から賜る信心である。

苦悩の根元が打ち破られて「よくぞ人に生まれてきたものぞ」と人生の目的が達成できる。

{ 真・仮を知らざるによりて、如来広大の恩徳を迷失す }

本当の人生の目的を知らないから「よくぞ人間に生まれてきたものぞ、との生命の歓喜がないのである」真とは「人生の目的」で、仮とは 生き甲斐や趣味、目標等の「生きる手段」のこと。

以上